

分類語彙表

国立国語研究所

秀英出版

分類語彙表 目 次

刊行のことば

まえがき 1

分類語彙表の意味

この分類語彙表の性質

この本の体裁

分類項目一覧 10

分類語彙表 21

五十音順索引 169

まえがき

分類語彙表の意味

ここに分類語彙表というのは、一般に一つの言語体系の中で、その語彙を構成する一つ一つの単語が、それぞれどのような意味で用いられるかを一覧できるように、単語が表わし得る意味の世界を分類して、その分類の各項にそれぞれの単語を配当したものである。すなわち、その分類の各項には、同義の単語が集められることになるので、これを同義語類義語集または同義語類義語目録とよぶこともできよう。

かような分類語彙表の先例としては、東洋において古く爾雅があり、その流れを汲んで日本でも和名類聚鈔や節用集などの分類体の古辞書がある。また西洋においては、有名な Roget's Thesaurus そのほかの多くの語彙表や辞書が行なわれている。(付記参照)

それらの表は、それぞれ独特の分類によって項目が排列されていて、単語を検索するには、別に五十音順とかつづり字順とかの索引を必要とするものである。中には類義語辞典として、分類各項目の見出しのつづり字によって項目を排列し、検索をたやすくしたのものもあるが、そのような種類では、項目間の類別について一覧することができない。

さて、かような同義類義の単語の目録には、次のような役割がある。

まず第一に、表現辞典、詞藻辞典としての役割であって、従来の実用的な類語辞典の類は、ほとんどそのためのものである。すなわち、会話や作文の際、適当な、またはより適切な表現を選び、また同一の表現の単調な繰返しを避けるために、用いられるのである。

第二には、ある種の方言辞典にその試みがあるように、方言の分布や命名の変遷を知る手がかりとしての役割である。同じまたは類似の語形がどのような意味において分布するかは、つづり字順の辞書で追究されるであろうが、ここでは一つの意味、一つの分類項目について、どのような命名が分布し、どのように変遷したかを知るのである。いわば方言地図そのものであるが、一国内の方言に関するだけでなく方言間の比較研究でも、また文献に徴する史的研究でも、かような形での整理が便利である。

第三には、ある個人またはある社会の言語体系もしくはある言語作品について、表現上の特色を見る物指しとしての役割である。このような「意味の一覧表」に語彙をあてはめてみると、表現の過不足や、用語の特徴的な集中が明らかになるであろう。そして、もし分類が十分妥当であるならば、異なった作品の間とか、異なった言語体系の間とかの語彙対照の物指しとなり、一方では作品の文体論に関係し、一方では、それぞれの言語社会の精神構造や生活構造を解く基本的手段ともなるであろう。族制語彙とか、色彩語彙とかいう、一部のまとまった項目についての研究もあるが、それを語彙の全領域に及ぼして考えるのである。

第四には、これがわれわれの主要な関心点であるが、基本語彙設定のための基礎データとしての役割である。これは第三の役割と関係するところ密接であるが、一國語の基本語彙は、生活上のまたは意味上の各分野から、最も適切な単語を選ぶことによって定められなければならない。そのためには、表現されるべき世界、意味の全分野が、偏りなく余すところなく見渡されなければならない。そこに分類一覧表があつて、その各項に取める語

まえがき

句の重みが、その必要性や、はたらきや、語感など、また実際の使用率や使用範囲などの観点から、互いに比較商量されることになる。すなわち、類義語間のつりあいを、広い見渡しの上で、狭くも広くも見ることができ、したがって適切な語の選択ができるということになるであろう。ある特定の観点から広く語を拾いあげるには、五十音順の辞書からでは、何としても偏りを免れないのである。

なお、このような分類表は、辞書編集における解説作業に寄与する。その辞書が、辞書の体裁として、五十音順であるにせよABC順であるにせよ、意味の解説にあたっては、少なくとも類義語関係を無視してはならないのであって、そのためには、語の選択ばかりでなく、かような分類目録が利用されるべきである。

また、分類を妥当に組織だて、かつ分類項目に系統的に番号を与えることは、翻訳や情報処理たとえば文献要約などの機械化の一つの方法に、基礎的な作業となるものである。これは、近い将来の重要な問題で、すでに Roget's Thesaurus を利用した試みが報告されている。

〔付記〕

分類体の語彙一覧表・辞書の類の先例として、目にふれたおもなものをあげておこう。(下記の(7) DORNSEIFF の著書には、きわめて豊かな書目がついている。)分類の細部を紹介することはできないが、類と項の数だけ付記する。なお類と項との間に中区分のあるものもあり、また、さらに小区分をもつ項のあるものもある。

まず外国語については

1. P.M. ROGET : Thesaurus of English Words and Phrases, London 1851.
—6類, 1000項
2. C. O. S. MAWSON : Roget's International Thesaurus of English Words and Phrases, a complete book of synonyms and antonyms founded upon and embodying Roget's original work with numerous additions and modernizations, New York 1939. —分類同上
3. L. V. BERREY : Roget's International Thesaurus, third edition, New York 1962. —分類同上
4. MAWSON and WHITING : Roget's Pocket Thesaurus, a cardinal ed., New York 1951. —分類同上
5. N. LEWIS : The Comprehensive Word Guide, New York 1958. —1144項
6. L. V. BERREY and M. Van den BARK : The American Thesaurus of Slang, New York 1948. —18類, 940項 (2版24類, 940項)
7. F. DORNSEIFF : Der Deutsche Wortschatz nach Sachgruppen, Berlin 1959(5版). —20類, 910項。(巻頭に Einleitung Wortschatzdarstellung und Bezeichnungslehre. Büchernachweis für Begriffs-wortforschung nach Sachgruppen.)
8. A. PINLOCHE : Etymologische Wörterbuch der Deutschen Sprache (Dictionnaire étymologique illustré de la langue allemande), Paris 1922. —6類, 82項。
9. WEHRLE-EGGERS : Deutscher Wortschatz (Eine Wegweiser zum tref-

- fenden Ausdruck), Stuttgart 1961. —6類, 1000項. (Roget の組織のドイツ語への適用)
10. C. BALLY : *Traité de la stylistique française*, Genève et Paris 1951. (3版) —10類, 297項. (第2巻付録 Tableau synoptique des termes d'identification et de leurs principaux synonymes. 具象物の名を含まず)
 11. E. BLANC : *Dictionnaire universel de la pensée alphabétique, logique et encyclopédique* (Classification naturelle et philosophique des mots, des idées et des choses, ouvrage spécialement destiné aux professeurs et aux écrivains), Lyon 1899. —16類, 178項.
 12. E. BLANC : *Dictionnaire alphabétique et logique de la langue, de la géographie et de l'histoire à l'usage des écoles*, Lyon et Paris 1922. —分類同上.
 13. K. PLOETZ : *Vocabulaire systématique et guidé de conversation française* (Methodische Anleitung zum französischen Sprachen), Berlin 1883. —33類.
 14. A. SNYCKERS : *Duden Français*, (Dictionnaire illustré de la langue française correspondant au *«Bildwörterbuch»* de Duden, Leipzig 1937. —12類, 348項. *Duden Français* (Dictionnaire en images), Mannheim, 1962 (2ème éd. corrigée). —15類, 368項. (具象物の名だけ)
 15. R. HALLIG und W. von WARTBURG : *Begriffssystem als Grundlage für die Lexikographie* (Versuch eines Ordnungsschemas), Berlin 1963. —(2版 neu bearbeitete und erweiterte Auflage) —3類, 204項.
 16. J. CASARES : *Diccionario ideológico de la lengua española*, Barcelona 1954. —38類, 2000項. (Parte sinóptica. Plan general de la clasificación ideológica)
 17. L. TESNIERE : *Petit vocabulaire russe, table sémantique*, Paris 1957. —4類, 200項.
 18. C. D. BUCK : *A Dictionary of Selected Synonyms in the Principal Indo-European Languages*, Chicago 1949. —22類, 152項.
 19. 中国文字改革委員会研究推广処 : *普通話三千常用詞表* (初稿), 北京 1959. —11品詞, 73項.
 20. 倉石武四郎 : *岩波中国語辞典*, 東京 1963. —12品詞, 148項.

日本語については,

1. 垣内松三『基本語彙学』1938. —6類, 1000項 (Roget の組織の日本語—小学国語読本巻四までの用語—への適用)
2. 土居光知『基礎日本語』1933. —46類 (1000語) (『日本語の姿』(1943) の「基礎日本語分類表」の1100語も同じ46類)
3. 東条操『標準語引分類全国方言辞典』1954. —12類.
4. 田中久直『学習基本語彙・指導の実際』1956. —11類, 86項. (第一章 三 読みの

学習基本語彙とその学習配分)

日本語の3『全国方言辞典』の分類は、節用集の流れを汲むもので、各類の中は標準語が五十音順に排列されている。1, 2, 4, は、現在自由には手に入れがたい。

語彙の全分野にわたるものは、現代としては見当でない。古い『倭名類聚抄』『節用集』『和漢三才図会』などの類については、今省略に従う。

この分類語彙表の性質

この分類語彙表の分類の仕方は、さきに国立国語研究所報告4『婦人雑誌の用語』(1953)および同報告13『総合雑誌の用語』後編(1958)に収めた分類語彙表の分類の仕方を大体において踏襲するものである。三つの分類語彙表の間には、それぞれ修正による小異はあるが、同一の考え方にもとづいている。それは、部分的には職業分類や商品辞典・動植物図鑑等の助けを借りつつも、分類体辞書の先例をあまり考慮することなく編み出された試みであって、独創ではあるが独断的であり、またいまだに完全なものではない。しかし、一通り語彙の全分野を見渡す足場の役目は、果たし得るものとする。

分類の大体を説明するならば、まず大分類として、

1. 名詞の仲間——体の類
2. 動詞の仲間——用の類
3. 形容詞の仲間——相の類
4. その他の仲間

の4類に分ける。

1. 名詞の仲間(体の類)には、《何、何ごと、何もの、どれ、だれ、いつ、どこ、いくつ》等の概念を表わす語と、それらを問いとしたときの答えとなるべき語を収める。

2. 動詞の仲間(用の類)には、《ある》に関連するもののほか、《どうする、どうなる》等の答えとなるべき語を収める。

3. 形容詞の仲間(相の類)には、《ない》に関するもののほか、《どう、どうだ、どんな、どんなに》等の概念を表わす語、およびそれらを問いとしたときに答えとなるべき語を収める。品詞論的には、形容詞ばかりでなく、いわゆる形容動詞、連体詞や、ある種の副詞を含む。ただし、(3.)に含めた形容動詞と(1.)に収めた名詞との間では、その所属の決定に多少の動揺のあるものもある。ことに、時に関することばでは、(1.)と(3.)とにわざと重出させた場合が多い。

4. その他の仲間には、いわゆる接続詞の類、感動詞の類、ある種の副詞の類等を収める。すなわち、概念と概念との間の、また叙述と叙述との間の関係づけや、感動や、呼びかけ応答や、判断・期待・仮定などの叙述態度(または表現意図)についての予告や、待遇や、を表わす語を収める。

このような、品詞論的分類をまず第一に行なうことをしないで、《美》と《美しい》、《動き》と《動く》をそれぞれ一つの項目の中に合わせるやりかたも、十分考えられることではあるが、実際上は困難であった。ただし、それぞれの仲間、特に(1.)(2.)(3.)のそれぞれの細分にあたっては、なるべく平行するようにし、細分の番号をある程度一致させるように努めた。

前述のように、名詞と形容動詞語幹との間には所属決定の困難があるが、それ以上に、

名詞と複合サ変動詞語幹との間にも問題がある。これらを(1.)の仲間と(2.)の仲間とに分離することは、窮屈な品詞論以外にいわれはない。細分にも関係することであるが、今は作業上やむをえず、もののまま、〈変化〉という名詞は(1.)の仲間、〈変わる〉という動詞は(2.)の仲間に入れてある。しかし、これらは、(1.1501)と(2.1501)というように細分の番号を共通にするから、相互に検索することはたやすい。

なお、形容詞・形容動詞の、語尾〈さ〉を伴ったものは、普通に名詞として扱われるが、ここでは、〈高さ〉〈長さ〉など少数の慣用例を除いて、(1.)の名詞の仲間に掲げなかった。すなわち、〈快さ〉〈長たらしさ〉等は、(3.)の形容詞等の仲間収める〈快い〉〈長たらしい〉等の一種の活用形として取扱ったことになる。

各類の細分は次のようになる。

(1.)の仲間は、まず、人間活動に関するものと、そのあり方のわく組みに関するものとに大別される。わく組みに関するもの(1)は、《事実、存在、状態、力、変化、空間、時間、形、数量》を含む。人間活動に関するものは、活動の主体であるもの(2)と人間活動そのものの様相—精神と行為(3)と、人間活動の相手として存在するものになるが、活動の相手は、人間が直接に活動の結果として作り出した物および作り出すために利用する物(4)と、人間の主体的活動からは比較的自由に、外界として存在するもの(5)となる。

以上の5部門は、(1.)の仲間すなわち体の類について立てたものであるが、(2.)の仲間、(3.)の仲間についても、(1)(3)(5)に相当するものがあり、それぞれ、(2.1)(2.3)、(2.5)；(3.1)、(3.3)、(3.5)として分類される。これを整理して示すと、次のようになる。

1.1	2.1	3.1	抽象的關係(人間や自然のあり方のわく組み)
1.2	—	—	人間活動の主体
1.3	2.3	3.3	人間活動—精神および行為
1.4	—	—	人間活動の生産物—結果および用具
1.5	2.5	3.5	自然—自然物および自然現象

各部門の間の区別は、常識的には比較的明らかであると思われる。ただ、語の譬喩的用法をもつものは、所属に問題が起こり得る。たとえば、〈爆発、冷却〉などは、心理的な意味にも用いられることがあるが、これらは常に原義が支えになっているものとして、自然の部門にのみ収めておいてよからう。しかし、〈やく〉については、嫉妬の場合と火の場合とで、(2.3)の人間活動と(3.5)の自然現象とに別々に掲げておくほうが便利であろう。かような問題は、この分類表で常に明白に処理されているとはいいがたい。

各部門が、さらにどのように細かく分けられているかは、11ページ以下の分類項目の一覧によって概観されることを望む。番号を与えた項目の数は、4類を通計して、798項になる。(1.)の類545項、(2.)の類145項、(3.)の類85項、(4.)の類23項。そのうち(2.)(3.)の類の項目は、内容上ほぼ(1.)の類の項目に重なる。

その分類と各項目の排列については、原理的に述べるのが至極困難である。各項目には細分の番号がつけてあるが、数多い項目をただ一つの順序にならべることは、全く検索の便宜によるものである。ただ、互いに関連する項目は相接して排列されるが、その一般の総括的な内容を持つ項目は、部分的な内容を持つ項目よりも先にあげてある。たとえ

ば) (1.57) は身体に関する部分であるが、(1.570) は、(1.571~8) の身体各部位に関する総記の部分となす。

かような分類項目は、実は分類排列の原理が確立されていないままになされたものであり、時として立案者自身にも不満を覚えさせる場合がある。たとえば (.12) の中の《出現》や《消滅》などは、(.15) の《変化》の類に含めてもよろしかるべく、また (.58) の《生死》なども、《変化》にあわせることも考えられるであろう。さきに譬喩的用法についてふれたが、人間活動や自然現象としてまとめたものの中に、(.1) の《関係のわく》に入れてよいものもありそうである。

さらに、分類各項目に収めた語句については、趣旨としては、類義同等のものは同一項目に収められるべきものであって、努めて集合をはかったが、なお別の項目に分属したままになっているものがあるであろう。その多くは、共通部分をもつ複合語の組で、一つの語については前部分を重視し、他の語については後部分を重視したというようなことから生じた不手際である。

なお、従前の研究所報告 (4, 13) における分類語彙表では、一つの語形は一つの項目にしか掲げなかった。すなわち、一つの語については一つの意味しか取りあげなかったのであるが、このたびの分類語彙表では、ある程度、多義を考慮して、一つの語でもいくつかの項目に掲げたものがある。先にあげた〈やく〉もその例といってよい。また今の複合語、たとえば〈言い直す〉を (2.312) の《言語》の項と (2.1501) の《改新》の項とに両掲したようなものもある。もとよりこれらも十分精到なものではない。

複合語のうち、〈真善美〉や〈和敬清寂〉のように、ちがった範疇に属する語がそれぞれ独立しつつ複合しているものでは、それぞれの語をそれぞれの項目に分出しないうけにいかなかった。〈公序良俗〉のような結合も、もとより〈公序〉と〈良俗〉とにわけて考えることにした。

なお、一つの項目中に収めた語の性質について、つけ加えておきたい。それらの語は、同義類義の関係で一つにまとめられているものである。同義とか類義とかいうことの意味については、ここで詳細に論ずることはできないが、いわゆる待遇(敬意の方向と量)や、美醜、新古、詩性などの語感をぬきにして、同じ文脈の同じ地位(また転換された文脈の相当する地位)に現われることが許される限りのものである。その限度には広狭さまざまのとり方があって、類義の範囲は広がり得るのである。しかし、ここでは、あらゆる文脈について検証した結果を示すのではないことを、ことわっておかなければならない。

もう一つのことわりは、一つの項目に収めたのは同義類義の語の群であって、自由連想による語群ではないことである。従来の分類体辞書の中には、生活場面を分類してそれぞれの場面に現われ得る語をあげる、会話書の色彩の強いものがある。実用的には最も自然な体裁で、生活場面と語との関係を見るのに有効で便利なものではあるが、ここではむしろ、一つの意味が生活場面に応じてどのような語として現われるかに関心があって、自由連想をことさら極力避けようとした。項目間の排列はいわば連想的なものであり、項目内の語の排列も、生活場面による自由連想を全く排除し得たとは言い切れないが、趣旨として上の通りである。たとえば〈ビール〉については、飲酒行動に関連して、《酒・スタウト・ウイスキー・飲む・酔う・一杯・あわ・ジョッキ・コップ・ほろにが・ホップ・赤ら顔・ビヤホール》等々が連想されるであろう。しかし、この一群の語は、〈飲む〉や〈コ

ップ>にとっては必ずしも同等の重要性を持つとは言えない。それにはその連想語群がある。連想語群をとらえることも語彙論上の大切な仕事であると思われるが、ここでは、<ビール>をただ<酒・ウイスキー・スタウト>とグループをなすものとして扱い、<飲む>や<ビアホール>との関係を断ったのである。

この分類語彙表に収めた語は、およそ三万二千六百語である。これらの語は、国立国語研究所報告21『現代雑誌九十種の用語用字』第一分冊（1962）の語彙表に掲げる高使用率の語のうち、人名、会社名、球団名等の個別の名、および記号の類を除く約七千語を中心とし、それにつづく使用率をもつ約五千語を補い、さらに阪本一郎氏の『教育基本語彙』に選ばれた二万二千五百語のうち、上と重複しないものを加え、また、それらの語を各項目に分類したものを通覧した上で主観的に増補したものを含むものである。日常生活でより基本的な役割をはたしている語は、大体において取りあげてあるかと思うが、主観的増補に際して、この表を見ればすぐにその項目に属すべきものとして思い浮べることができると思われる語、所属項目の明白な語は、よほど重要と認めない限り、割愛したものがある。たとえば<ひちりき>をあげないが、それが<楽器>の類（1.456）であることは明らかであろう。

また、いくつかの語が組になっているような場合に、一つか二つだけをあげて他を加えなかったものがある。たとえば<真北、真西>はあげたが、<真南、真東>をしないで加えなかった。また、比較的専門特殊に属すると認める語も多くを捨てた。すでに中心の七千語の中に、たとえば裁縫用語（この表の1.384や1.42など）や、野球や将棋の略語（この表の1.337や1.457など）もあるのであるが、これらとの比較の上で、基本的な語の採択を決定させるのが、この表の役割そのものと考えられるわけである。

各項目に必要な語句を補充すること、それらの語句の必要さを他の語句と比べること、それが問題である。ある項目では、新たに加えられるようとする語が、大部分かたかなことばであるような場合もあるであろう。単に同一の物ごとの命名の新旧として、新語または古語がつけ加わる場合、また同類ではあるが全く新しい物ごとへの命名がつけ加わる場合もあるであろう。これらの増補とその評価は、すべて本書の利用者にまかされている。

われわれの語彙調査の結果から取り入れた語は、われわれのいわゆる β 単位であって、比較的短い語形である。これに対して阪本語彙から取り入れた語や、主観的な増補による語は、必ずしも β 単位ではなく、 β 複合も含まれている。われわれの β 単位では、<自転>と<車(チャ)>とはそれぞれ1単位であるが、そのほかに<自転車>という複合語は報告21の使用率を示す語彙表にはのせてない。今この分類語彙表では、<自転>と<車(チャ)>を収めることはもちろんであるが、<自転車>もまた阪本語彙から補ってのせた。また比較的少数ではあるが、<しりもちをつく>というような慣用語句も補うことにした。これは β 単位の語の意味を考えるについても、疎密に β 単位で一貫するよりも、普通の表現単位をある程度採用しておくほうが、実用的な目的にかなうと考えたからである。

ただ、中心の七千語については、後述のように、星印を頭につけて示すことにした。すなわち、単独の<自転>や<車>は星印で示される。それに対して、<自転車>は、実際<自転>と<車>との組合せとして、32回現われていたのであるが、星印では示されない。この点は多少問題になるであろうが、今はそのままにしておくことにする。

この本の体裁

この本の分類語彙表は、分類項目一覧と本表と五十音順索引との3部から成る。

分類項目一覧は、本表の各項目につけた見出しのことばを、本表の項目番号順に掲げたものである。その見出しは、必ずしも項目に収める語のすべてをおおむねのことばであるとは限らないが、大体において、その項目の性質を示し得るであろう。いわば分類の総目録である。

本表は、分類の1項目ごとに、同義類義の関係の認められる語の群を収めて、一つの順に排列したものである。項目には一つ一つ分類番号をつけ、また見出しを設けた。

分類番号は、五十音順索引および本表での相互参照に用いられる。たとえば(1.201)や(1.1257)のように、整数位1けたと、小数点以下3けたまたは4けたで表わす。(4けた目は、小字を用いた。)整数位の1~4は、品詞論的区別の4類(4ページ参照)、小数点以下第1位の1~5は、意味範囲の5部門(5ページ参照)、第2位以下はその細分である。小数点以下は品詞論的な4類の間で、相互参照に便利のように内容上関係のある項目に、なるべく同じ番号を(少なくとも小数点以下第2位まで)与えるようにした。そのため、(2.)の類、(3.)の類では、隣りあった項目で番号の飛んでいる部分がある。(なお、報告21の語彙表にも、この分類番号が示してあるが、多少変更したものがあるので、本書の索引を利用されたい。)

見出しは、努めてその項目の全体を示すような語を選んだが、いくつかの語を併記した場合も多く、また説明的な語句を用いた場合もある。

項目の大きさ、すなわち収容語数は、必ずしも平均していない。しいて独立の項目に立てなくてもよさそうなものも、認められないわけではないが、分類表作成の過程での混乱を避けるため、修正を最小限度に止めた。

一つの項目の内部でも、さらにいくつかのグループが認められるものは、グループごとに行を変え、さらに番号をつけたものもある。そのグループの大きさ、またグループ分けのレベルについても、項目の場合と同様に、過不及がある。

星印の語は、報告21の語彙表に掲げるもの、すなわち、現代雑誌九十種の語彙調査において、使用率が0.014パーミル以上(標準使用度数が7以上)であった語である。ただし、この語彙調査は β 単位を数えたものであり、したがって星印の語は、もとより β 単位である。しかし、この分類語彙表には、 β 単位以外の語(語彙調査で2単位以上に分割した語)をも収めているので、この表の中で、星印の語とその他の語とを、使用率の上から比較することはできない。

なお、2項目以上に星印で重出するものがあるが、それぞれの項の意味で基準以上の使用率があったものとは限らない。報告21の語彙表では、一般に多義の用法を合わせた使用率が示してあり、今はそれを意味ごとに分割せず、重出する限り星印で示した。〈もの〉は報告21では〈者〉と〈物〉とを合併しているが、この分類語彙表では、〈者〉と〈物〉とを別に出して、ともに星印にしてある。(いくらか星印の脱漏もあろうかと思われる。再治の機を待つ。)

語の表記は、便宜に従った。もとより表記の標準を示すのがこの本の目的ではないので、当用漢字表にはかかわらずに漢字を用いたものがある。また、同じ語を前後異なった表記

で両出したものがあり、送りがなもまま不統一の点がある。

漢字については、括弧の中に読み方を注した場合もある。同じ漢字を音訓両様によませた場合もある。

動詞、形容詞の示し方については、報告21の語彙表の見出し語形の示し方の考えに準じた。すなわち、

動詞は連用形を代表の形とし、五段活用は<思いう>のように、代表形のあとに連体形の語尾を小文字で添え、一段活用は<起きル>のように、代表形のあとにかたかな<ル>を小文字で添え、カ変・サ変は、<来<ル>><関し<ル>>のように、代表形のあとに連体形を小文字で添えた。

形容詞は語幹を代表形とし、<赤い>のように連体形語尾<い>を小文字で添えた。<暖か>のように、形容詞活用と形容動詞活用を持つものについては、<暖かい、な>のように、両方の連体形語尾<い、な>を小文字で添えた。そのほか、副詞的語句について、語尾の<て><と><に>等を小文字にしたものがある。

語のあとに、他の分類番号を注記したものがある。これは、多義の語で他の項目にもはいっているもの、また、本来他の項目に入れるのが適切と思われるもの、などについて、相互参照の便宜のためにつけたものである。同一類の中の他の項目を指示するには、類の番号、すなわち整数位の数字を省略した。たとえば、(1.1600)の<心境>に(.3004)とあるのは、同じ(1.)の類の中の(1.3004)を参照せよということである。

五十音順索引は、本表に収めた三万余の語句を五十音順に排列し、各語についてその語が本表に現われる項目の分類番号を示したものである。語の表記は、外来語および動植物名をかたかなとし、その他、漢字を用いるには、必ずしも当用漢字表の制限によらなかった。なお、動詞・形容詞は、本表の示し方にかかわらず、普通の辞書のように終止形で掲げた。形容動詞は語幹だけを示すのを原則とした。

分類語彙表

- 1 約三万二千六百の語句が、意味の上から4類、13部門、798項目に分類してある。
- 2 分類の各項目には、分類番号と見出しが与えてある。
- 3 見出しは、その項目の内容がなるべくよく代表されるように選んだが、意味上の大体の目安に止まる。
- 4 各項目に収めた語句は、小グループをなすごとに行を変えて一括した。グループごとにさらに番号をつけた場合もある。
- 5 *印をつけた語は、国立国語研究所報告21『現代雑誌九十種の用語用字』第一分冊(1962)の語彙表の中に掲げられた語である。すなわちそれらの語の標本使用度数は、それぞれ7以上である。
- 6 語のあとにつけた括弧内の小さい数字は、その語について参照すべき他の項目の分類番号である。整数位の数字を欠くものは、同じ「類」の中の項目の番号である。
- 7 分類を概観するには、前に分類項目一覧がある。語を検索するには、後に五十音順索引がある。解説は、まえがきを見られたい。

1. 体 の 類

1.1 抽象的關係

1.100 こそあど

*こ *これ これら *そ *それ *あれ *か
 *どれ *どっち *どちら *いずれ 這般
 *何(なに, なん) 何か *何ら *何事 *何物
 *もの(者, 物) の(私のです) *分(ぶん) (.198%)
 *こ(宛こ)
 *ほう *前者 *後者 *他方
 何々 どれどれ 何くれ 何やかや *あれ
 これ
 *おのおの 各個 *個々(3.100) 各人(.201)
 各省 戸ごと(3.100)

1.101 事柄

*対象 *事(こと・じ) *事象 *事柄 *事情
 事物 雑事 *物事 一事 *万事 諸事
 諸式 万端 万般 諸般 一式 一端
 *件 一件 案件 *本件 沙汰 他事 よそ
 事 余事 つかぬ事 余の儀
 *出来事 *事件 *事故 異変 変事 大ごと
 *大事(だいじ) 一大事 小事 瑣事 椿事
 ただごと *奇蹟
 後事 時事 *物(もの) 物(ぶつ) 物件 物心

1.102 事項

*事項 *条項 *項目 費目 *項 前項 別
 項 条 くだり
 *由 *旨 儀 廉(かど)

1.103 真・実

*現象 諸行 真偽 実否 虚実 *真 真如
 真理 *真实 *実
 *事態 *事実 *現実 内実 *実際 実地
 情実 史実 *実態(.130a) 名実(.310a)
 *秘密(3.31) 秘 隠し事 秘事 密事 機密

秘密 秘機 軍機 機微 内幕 内証 内
 情(.130i)

委細 仔細 *詳細

1.104 本体

*体 個体 気体(.510) *主体 客体 *自体
 本体 *実体 *正体 得体 神体 機体
 *人体(.570)

正副 *正 *副 亜(3.100)

*本物 *実物 *にせ物 偽物 にせ *振り
 *代理 *代わり 間に合わせ 親代わり
 身代わり かけがえ 替え玉 控え 見返
 り 前身 後身 *候補 *補助 補欠 補
 *代表 *本格

先例 前例 ためし *見本 標本 サンプ
 ル 模型

*主 *主流 亜流 末流 嫡流(.110i) 本筋

*中堅

*資料 史料 データ

*他(た) *ほか 他事 ひとごと 別問題

余儀 *別個 別格
 粹(.133i) 精華 神髓 精髓 エキス 生一
 本(3.130)

1.110 類・例

*種類 範疇 種目 細目 *種 *類(るい)
 *たぐい 部類 *部門 種別 性別 国
 別

*品種 *業種 同類 変種 変り種 異種
 *一種 *各種 多種

*形式 *様式 式 *タイプ *型(.180) 類型

*流(りゅう) 単式 複式

*象徴 シンボル *典型 範 模範 範 範
 師表 手本 *モデル 原型(.180)

*例 ケース 実例 事例 通例 類例 特

1.110₁

例 悪例 適例 好例 *例外 用例 引
例 凡例 *判例
外延 内包

1.110₁ 等級・系列

*位(くらい) *級 *等(とう) *階級 等級 品等
親等 官等 *階層 *層 *クラス 職階
冠位 位階 勲等
*上 *中 下(げ) *上級 *中級 下級 *高
級 低級 初級 *上等 *中等 下等 *高
等 並等 初等 上層 下層 初段 高段
特等 特級
*基準(規準) *標準 *水準 レベル 目安
本位

同位(.160₀) 低位
系列 *系統 *系 血統 血すじ 毛なみ
家系 学統 父系 母系 直系 傍系
嫡流 家柄(.341₀)
系譜 系図 *シリーズ 水脈 脈絡

1.111₀ 関係

*関係 間柄 続き柄 *仲 恋仲 遠縁 係
累 縁故 *血縁 腐れ縁 良縁(.335)
内縁(.335) 不仲
かかわり *関連 連関 相関 関与 かか
りあい 縁つづき
*縁 えにし 機縁 悪縁 奇縁 ちなみ
きずな 縁起 ゆかり 由緒
*格 主格 相对・絶対(.113₀, 3.112)

1.111₁ 本

本末 大本 大もと 宗(そう) *根本 根
幹 基幹 根柢 元・基 本元 *基本
*もと い *基礎 基底 基盤 素地 下地
骨子
みなもと 源泉 *根元 おこり 起源 語
源 *電源 氷源 給源 光源 湯元 禍
根 源流 *原(げん) *たね

1.111₂ 因果

*条件 悪条件 *前提 大前提 帰結 三拍
子 *要件
因果 因 因子 *因縁 *原因 素因 真因
*要因 起因 誘因 近因 遠因 成因
作因 死因 勝因 敗因 訴因 *本因坊
機縁(1.111₀) *せい、由縁 モチーフ
*結果 *成果 戦果 *効果 逆効果 かい
年がい、生きがい
納まり *落ち 帰趨
ききめ 効能 効験 効用 実効 即効 速
効 特効 偉効 奏効(.153₄)
*影響 あたりさわり 報い 応報 果報
余徳 靈験 まきぞえ 累 しわ寄せ

1.111₃ 理由・目的・証拠

*理由 事由 *わけ *故 *ゆえん 何故
*根拠 より処 論拠 典拠
*目的 *目あて *目標 めど *ため *用
途 使途 使いみち *実用(.385₂) 日用
当用 食用 飲用 薬用 *乗用 自家用
社用 軍用
*手段 よすが 手だて(.308₁)
*証拠 言質 *口実 例証(.307₀) 反証 傍
証 心証 書証

1.112₀ 異同

異同 大同小異 *同(どう) 同上 *同一 同
断 にたりよったり(3.112) 同学 イコール
同類 同系 同格 同等 同質 同位(.110₀)
同権 同点 *同期 同級 同郷 同村
同業 同姓 同性 同室 同乗 同船、車
同宿 同行 同病 同好 同日
*相違 *違い 異(い) 差異(差違) 個人差
差等 甲乙 不同 小異 *異(こと) 差
別(.306₂) 人違い

1.112₁ 類似・一致

類似 相似 近似 酷似 空似 比類 比肩
匹敵 紛い もどき 擬似 紛れ
*一致 満場一致 合致 合一 符合 暗合

五十音順索引

- 1 本表に収めた語を五十音順に排列した。
- 2 番号は、本表の項目の番号である。
- 3 動詞・形容詞は終止形、形容動詞は語幹で掲げた。
- 4 動植物名および外来語は、この索引ではかたかなを用いた。用字は、必ずしも当用漢字表の制限にはよっていない。また、索引と本表とで文字使いの一致しない場合もある。
- 5 〈廓・郭清〉〈代・替える〉〈電器・機〉等とあるのは、それぞれ〈廓清〉〈郭清〉、〈代える〉〈替える〉、〈電器〉〈電機〉等、文字使いのちがうものを合併したものである。なお〈格差、較差〉のようにして、同音で同番号の項目に属するものを示した場合もある。
- 6 動植物名、国名については、本表の動植物、個有地名の項に掲げなくても、索引には載せたものがある。

あ		合図	1.3121	あえぐ	2.3394	呻る	2.3394
亜〔熟帯〕	1.104	アイスクリーム		敢えて	3.346	煽る	2.14
	3.100	愛する	1.434	和える	2.113		2.515
あ	4.310	愛惜	1.3042	亜鉛	1.5110	赤	1.502
ああ〔副〕	3.100	愛染	1.3020	青	1.502	垢	1.5111
ああ〔嗚呼〕	4.310	あいそ	1.3030	青青	3.502	赤々	3.502
アーク燈	1.460	あいそ(愛想)		アオイ	1.552	赤い	3.502
アース	1.462		1.3030	青い	3.502	あかがね	1.5110
アーチ	1.442	間	1.176	青息	1.583	あがき	1.3392
アームホール	1.184	間から	1.1110	青い鳥	1.562	あかぎれ	1.586
アール	1.1961	愛着	1.3020	青海原	1.526	あかく	2.3392
愛	1.3020	哀調	1.1303	青梅	1.552	赤子	1.205
藍	1.502	あいづ	1.200	アオガエル	1.563	証	1.3073
相〔接頭〕	3.112	相次ぐ	2.16	青木	1.551	赤字	1.3113
愛育	1.3642	相槌	1.3132	仰き見る	2.3090	アカシア	1.552
相討ち	1.357	相手	1.220	アオギリ	1.552	明かし暮らす	2.333
合鍵	1.454	アイデア	1.3061	仰ぐ	2.302	赤信号	1.3114
相変わらず	3.165	哀悼	1.3021	扇ぐ	2.3393	明かす	2.16
哀願	1.366	愛読	1.3150	青草	1.551	赤線	1.181
愛玩	1.3852	あいにく	3.165	青臭い	3.504	赤ちゃん	1.205
合着	1.421	アイヌ	1.2300	青黒い	3.502	赤チン	1.436
愛郷	1.302	合の子	1.2300	青ざめる	2.502	暁	1.1635
愛嬌	1.3030	相乗り	1.1541	青写真	1.322	赤土	1.5111
あいくち	1.4550	愛馬	1.561	青白い	3.502	アカデミー	1.263
愛くわしい	3.302	合判	1.1800	青筋	1.574		1.273
愛犬	1.561	相等しい	3.112	青空	1.520	アカトンボ	1.565
愛顧	1.3020	愛撫	1.3393	青田	1.470	垢抜け	3.330
あいこ	1.357	合服	1.421	アオダイショウ		赤恥	1.3041
愛護	1.3020	愛慕	1.3020		1.563	赤旗	1.458
愛好	1.3020	相辯	1.220	青竹	1.552	赤帽	1.2416
愛国	1.3020	合間	1.1610	青菜	1.551	アカマツ	1.552
合ことば	1.3121	あいまい	3.306	青二才	1.234	あがめる	2.302
愛妻	1.271	相見互い	3.112	仰のく	2.17	赤ら顔	1.571
あいさつ	1.3121	愛用	1.3852	仰のけ	1.1730	あからさま	3.501
愛児	1.213	愛欲	1.3042	青葉	1.553	赤らむ	2.502
愛着	1.3020	哀楽〔喜怒〜〕	1.3011	仰向き	1.1730	明かり	1.460
哀愁	1.3011	愛らしい	3.302	仰向く	2.17	上がり	1.154
愛書	1.3020	隘路	1.471	仰向け	1.1730	あがり〔終〕	1.1651
愛称	1.3102	アイロン	1.454	仰向ける	2.17	上がり下がり	1.1540
愛唱・謡	1.3150	哀話	1.321	アオムシ	1.565	上がり高	1.1911
愛惜	1.3020	合う	2.1550	青物	1.551	上がる	2.1540
合印	1.3114		2.112	青柳	1.552	あがる〔終〕	2.1502
愛人	1.221	会う	2.351	あおり	1.1511	あがる〔食〕	2.333
アイス〔氷〕	1.513	アウト	1.3374	煽り立てる	2.3682	明るい	3.501
						明るみ	1.501

あかんべい	1. 3390	悪漢	1. 234	悪癖	1. 3051	明け渡し	1. 3770
赤んぼう	1. 205	悪感情	1. 3004	悪魔	1. 203	明け渡す	2. 377
秋	1. 1624		1. 3020	飽くまで	3. 346	吾子(あこ)	1. 213
明, 空き	1. 1251	悪鬼	1. 203	悪名	1. 3142	あご(顎)	1. 571
飽き	1. 3002	悪行	1. 343	悪夢	1. 3002	アコーデイオン	
秋風	1. 5151	悪口	1. 3130	あぐむ	2. 301		1. 456
空き罐	1. 4512	悪妻	1. 211	悪友	1. 221	あこがれ	1. 3020
秋草	1. 551	悪事	1. 343	悪用	1. 3852	あこがれる	2. 302
秋口	1. 1624	悪食	1. 3332	あぐら	1. 3391	あこぎ	3. 341
秋作	1. 3810	悪質	3. 133	悪録	3. 341	あごひげ	1. 575
明き巢	1. 440	悪疾	1. 585	悪霊	1. 203	朝	1. 1635
明き巢狙い	1. 2419	握手	1. 3390	悪力	1. 1402	麻	1. 552
飽き足りる	2. 301	悪習	1. 3051	明くる〔翌〕	1. 1671	字	1. 3102
空き地	1. 470	悪臭	1. 504		3. 167	痣(あざ)	1. 587
	1. 527	悪趣味	3. 330	明くる朝	1. 1671	浅い	3. 1920
飽きっほい	3. 344	悪循環	1. 1523	明くる年	1. 1671	朝起き	1. 3331
明き止まり〔裁縫〕	1. 171	悪条件	1. 1112	明くる日	1. 1671	アサガオ	1. 552
	1. 3801	悪心	1. 3045	悪例	1. 1100	朝霞	1. 5152
商い	2. 376	悪性	1. 1330	悪路	1. 471	朝風	1. 5151
商う	1. 4513		3. 133	明け	1. 1581	朝霧	1. 5152
空き箱	1. 5154	悪政	1. 360		1. 1635	朝曇り	1. 5154
秋晴れ	1. 5154	悪税	1. 3720	上・揚・騰げ	1. 1540	浅黒い	3. 502
秋びより	1. 5154	あくせく	3. 347	揚げ〔裁縫〕	1. 183	朝食(あさけ)	1. 3332
空きびん	1. 4511	アクセサリー	1. 428	揚げ足	1. 573	あざけり	1. 3683
空き間	1. 184	悪銭	1. 3721	上げ下ろし	1. 1540	あざける	2. 3683
明き盲	1. 234	アクセント	1. 3112	明け方	1. 1635	朝御飯	1. 3332
空き家	1. 440	あくた	1. 410	あげく	1. 1651	浅瀬	1. 525
明らか	3. 501	悪玉	1. 2451	明け暮れ	1. 1613	浅漬け	1. 4321
あきらめ	1. 3043	悪天	1. 5154	上げ下げ	1. 1540	あさって	1. 1643
あきらめる	2. 3041	悪天候	1. 5154	上げ潮	1. 5155	朝っばら	1. 1635
飽きる	2. 300	あくどい	3. 341	開け立て	1. 1553	朝露	1. 513
あきれ返る	2. 301	悪党	1. 234	明けっ放し	3. 15	浅手	1. 584
あきれ果てる	2. 301	悪童	1. 205	明けひろげ	3. 15	あざとい	3. 304
あまされる	2. 301	悪徳	1. 3046	挙げて	3. 198	字(あざな)	1. 3102
あきんど(商人)	1. 2412	悪人	1. 234	明けの明星	1. 521	朝なき	1. 5154
	1. 3046	悪罵	1. 3130	明け放す	2. 1553	朝寝	1. 3331
悪	1. 5111	悪日	1. 1634	アケビ	1. 552	朝寝坊	1. 3331
灰汁(あく)	2. 135	あくび(欠伸)	1. 583	揚げヒバリ	1. 562	あさはか	3. 304
明, 空く	2. 1553	悪筆	1. 3151	明け広げ	3. 15	朝飯	1. 3332
開く	1. 3045		3. 31	あげほの	1. 1635	朝暁	1. 1635
悪意	1. 3310	悪評	1. 3142	揚げ物	1. 431	朝日	1. 521
悪逆	1. 585	悪病	1. 585	開ける	2. 1553	あさましい	3. 341
悪縁	1. 1110	悪風	1. 330	明ける	2. 16	朝まだき	1. 1635
悪化	1. 1502	悪文	1. 3154	上げる	2. 1540	アザミ	1. 552
		悪弊	1. 330		2. 377	浅緑	1. 502